



羅針盤

主幹 荒木 光弥

設立60周年を迎えた 海外コンサルタンツ協会

協会創設の時代

一般社団法人海外コンサルタンツ協会（ECFA）の創設60周年を祝う会が5月3日、東京・新橋の第一ホテル東京で開催された。会長の米澤栄二氏（株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバル・代表取締役社長）の開会挨拶に続いて、関係省庁（国土交通省、外務省、経済産業省など）、国際協力機構（JICA）理事長、そして政治家が祝辞を述べた。

それではさっそく、海外コンサルティングの歴史をたどってみよう。海外コンサルタンツ協会の創立は1964年（昭和39年）3月9日。初代会長は、協会設立の創業者でもある日本工営株式会社社長の久保田豊氏。そこで、次に同氏の歴史的な足取りを少し追ってみることにした。

久保田（敬称略）は戦前（第二次世界大戦）の朝鮮半島における電源開発の経験が、戦後も高く評価され、吉田内閣の海外経済調査会のメンバーとなり、鉄鋼業界の

要請で、インドのゴア鉄鋼鉱山の調査に参加した。これで久保田は日本工営が技術系コンサルタントとして国際的に競争できるという確信を得たとみられる。そうした中で久保田は発展途上国の開発援助を目指して、海外展開できると判断したのであろう。

こうして、1953年（昭和28年）9月、久保田はまず世界を見ようということ、借金をしながら世界視察旅行に出かける。その辺の発想が他と大いに異なるところである。ビルマ（現ミャンマー）、インド、パキスタンを経て、ヨーロッパへ向かい、パリから中南米と世界一周を果たす。久保田は本誌との1968年9月20日のインタビューで「世界一周は借金旅行だったけれども、仕事が無限にあることを知った」と語っている。久保田は恐らく、眼下に広がる無数の大河を見るたびに、多くのダムを築く夢を抱いたに違いない。「一つのダムで多くの人々の生活を豊かにすることができる。それを実現するのが私の本懐だね」と

誇り高く語る姿は今でも忘れることができない。

時代の大きな流れの中で

久保田が世界旅行をした1953年（昭和28年）といえば、吉田内閣が「アジア諸国に対する経済協力方針」を閣議決定した年で、翌54年にはアジアを中心とした英国主導のコロンボプラン（援助計画）に、日本も参加することになった。実は、これが日本の技術協力の始まりとなったのである。つまり、1962年の海外技術協力事業団（OTCA：JICAの前身）の発足へと歴史はつながっていったのである。

そして、その2年後の1964年（昭和39年）には、社団法人としての海外コンサルティング企業協会（ECFA）が、久保田の発案で創設されたのである。

当時の国際環境を見ると、同年3月に第1回国連貿易開発会議（UNCTAD）が開催され、途上国援助が国際社会にビルトインされる契機がつくられた。日本は

特集

スポーツの力

人をつなぎ、絆を紡ぐ



特別インタビュー

元サッカー選手 北澤 豪氏 ボールを通して感じる世界

1. 誰もが共に楽しむ

- 「走る喜び」を世界中の人に
義足づくりで社会を変えるサイボーグの挑戦
- 社会が作り出す「障害」をスポーツで解決したい
(一財)WITH PEER 代表理事 松尾 雄大氏

2. 未来へつなぐ

- サッカーで世界の「つながりの総量」増やす
(一社)Seeds代表、医師 西野 恭平氏

3. アクションを促す

- アスリートの発信力を生かせ
(一社)SDGs in Sports代表理事、元競泳日本代表 井本 直歩子氏
- スポーツの価値は「集客力」だけではない
(公社)日本女子プロサッカーリーグ 理事長 高田 春奈氏

4. JICAの取り組み

- スポーツを楽しめる平和な社会を目指す

2024年8月、パリオリンピック・パラリンピックが開催中だ。

近年、スポーツは国際開発の一つのツールとしても注目を浴びている。一緒に競技をしたり、同じチームや選手を応援したり、誰もが楽しみ、心を熱くさせ、人々をつなぐ。その交流が信頼や友好に発展し、強く結ばれた絆は、平和な社会の礎となる。

アスリート、クラブチームや企業・団体にスポーツに関わる人々へのインタビューを通し、スポーツの力を再考する。



南スーダンの平和づくりを目標に掲げている「国民結束の日」は、JICAの技術協力プロジェクト支援により、2016年から開催されている。2022年、2023年の第7、8回大会では「女性のスポーツ参加促進」を掲げ、選手の8割が女性になった＝(株)JIN提供、表紙裏参照

ボールを通して感じる世界

サッカーやスポーツの可能性

サッカー選手として活躍し、引退後も精力的にサッカーの普及や発展に尽力する北澤豪氏は、国際協力機構(JICA)のオフィシャルサポーターとして開発途上国の子どもたちにサッカーボールを届ける活動にも取り組んだ。世界各地を歩き、一人のサッカー人として何を感じたのか。「スポーツの力」をテーマにした本特集に合わせて、サッカーやスポーツを通じた国際協力の可能性について北澤氏にインタビューを行った。



2005年、シリアでパレスチナ難民の子どもたちを対象としたサッカー大会「JICAカップ」を開催=KTP提供

スポーツの可能性を信じて

スポーツの力を認識し、活用していくことは、より良い世界を実現するために大きな可能性を秘めていると思う。国籍や立場が異なる者同士でも、スポーツでなら理解し合えることもある。しかし、世界的な流れの中で、日本はスポーツを通じた社会変革という点では遅れをとっており、一般的にもスポーツの可能性に対する認識はまだ薄いのではないかと。

オリンピックやワールドカップなどの大きな大会は、見る者にとっても多様性に触れる機会にもなる。国際協力の精神を発信できる

絶好のチャンスでもあるだろう。スポーツはさまざまな垣根を超えることができる。

2016年のリオ五輪では、史上初の難民アスリートのチームが五輪旗のもとで競った。特に個人競技は、ボーダレスにさまざまな立場の人が大舞台を経験できる機会が増えた。

スポーツは、本性を見せないとやり合えない。だからこそ、共に汗を流すことで、相手と分かり合える。難民だろうが貧困だろうが関係なく、特に、同じ競技に取り組む場合は国境を越えて、同じ高みを目指す者同士としての信頼感もある。いろいろな事情や背景を

背負い、全力を尽くす目の前の人をリスペクトする気持ちになる。これはサッカーだけでなく、スポーツ全般的に言える。

途上国を歩いて感じたこと

JICAオフィシャルサポーターとして、開発途上国を歩き、多くのことを感じた。自分が訪問する国については、あえて事前情報を入れないようにしている。現地で何を感じるかが大事だし、自分が疑問に思ったことを相手に聞き、対話したい。「この国の人たちは困難な状況にあり、かわいそう」という先入観は、できるだけ持たないように意識している。本当に大切なものを見失わないようにしておきたいし、子どもに対しても、何かを教えるやろうと思わず、まずは友達になるよう努める。

どの国でも、子どもたちとボールを蹴ると「自分と彼らは一緒」「俺もこういうときがあったな」と感じる。ボールを介すると、一気に友達になり、共感し合える。子どもの頃、自分はスパイクを履いていたので、裸足の彼らとは環境は大きく違うかもしれない。でも、サッカーで同じように悔しい思いをしたからこそ、痛みを理解